古墳時代とは

○土などを高く盛ったお墓（古墳）を造る文化が流行った時代というところから、名前がつけられました。

○古墳時代の始まりは？

魏志倭人伝…邪馬台国の卑弥呼が亡くなり、径100余歩の高塚を築いたとの記述があります。研究者の中には、奈良県にある箸墓古墳を卑弥呼の墓であると考える人もいます。

○古墳時代はいつからいつまで

3世紀中頃～8世紀初め頃と考えられています。（研究者により見解が異なる。）

※古墳時代の次の時代は奈良時代（710～）ですが、未だ日本が統一されていない時代であり、すぐに切り替わったわけではありません。中央から遠い地域はなおさらです。

※長野県で一番古い古墳は、松本市にある弘法山古墳（前方後方墳）3世紀末？

○古墳時代の区分と特徴

前　期　　概ね、3世紀中頃から4世紀前半

・地域の首長墓　大型の古墳(前方後円(方)墳等　竪穴式石室

・権力の象徴・呪術的副葬品・・・鏡、剣、玉類等装飾品など

中　期　　概ね、4世紀後半から6世紀初め

・大王と有力豪族のお墓　大型の古墳(前方後円墳等)　横穴式石室の出現

・権力の象徴・・・直刀・鉄鏃・甲冑等の武具、馬具、玉類・金銀製装飾品、須恵器など

後　期　　概ね、6世紀初めから8世紀初め（家族墓のため、古墳築造は7世紀半ば頃まで、8世紀初めまで墓として使用。）

・地方官吏・有力農民の家族墓　古墳の小規模化・群集墳・横穴墓、横穴式石室

・権力の象徴的色彩が薄れる・・・直刀・鉄鏃等、馬具、玉類等の装飾品、須恵器・土師器

安曇野市にある古墳

○ 時　代・・・現在確認できる古墳は、古墳時代後期6世紀末から7世紀半ば頃までに築造されたと考えられています。また、古墳からの出土遺物から、8世紀初頭まで、家族墓としての使われていたことがわかってきました。

○ 古墳の数・・・現在、安曇野市内で確認することのできる古墳は、約100基余り

です。しかし古地図には、現在では確認する事の出来ない古墳が数多く記載されていることから、築造当時は、120基以上の古墳があったのではないかと考えられています。

○ 分布域・・・明科地域、穂高地域、堀金地域

・明科地域は、犀川右岸河岸段丘上に分布（会田川右岸犀川合流手前等）

・穂高・堀金地域は、松川村馬羅尾から穂高有明・牧・柏原塚原と堀金岩原から田多井にかけての西山山麓と、一部、穂高地域の扇状地扇央部にも分布しています。

・古墳の多くは、沢沿い（開発沢も含む）に群を成して分布しているのが特徴です。

Ａ古墳群・・・油川沿いに分布　　Ｂ古墳群・・・天満沢沿いに分布

Ｃ古墳群・・・富士尾沢沿いに分布

Ｄ古墳　・・・Ｄ1号墳（魏石鬼窟古墳…ぎしきのいわや）単独古墳

Ｅ古墳群・・・牧地区に分布する古墳群

Ｆ古墳群・・・塚原地区に分布する古墳群

Ｇ古墳・・・今井沢沿いに分布？　Ｇ１号墳（上原古墳）単独古墳？

※Ｅ群もＦ群も、沢沿いではなく一定の地区に分布する古墳群として、位置付けられていますが、今後、古代の開発沢の研究が進むことにより、他の古墳群と同じように、沢沿いに分布する古墳群となる可能性があります。

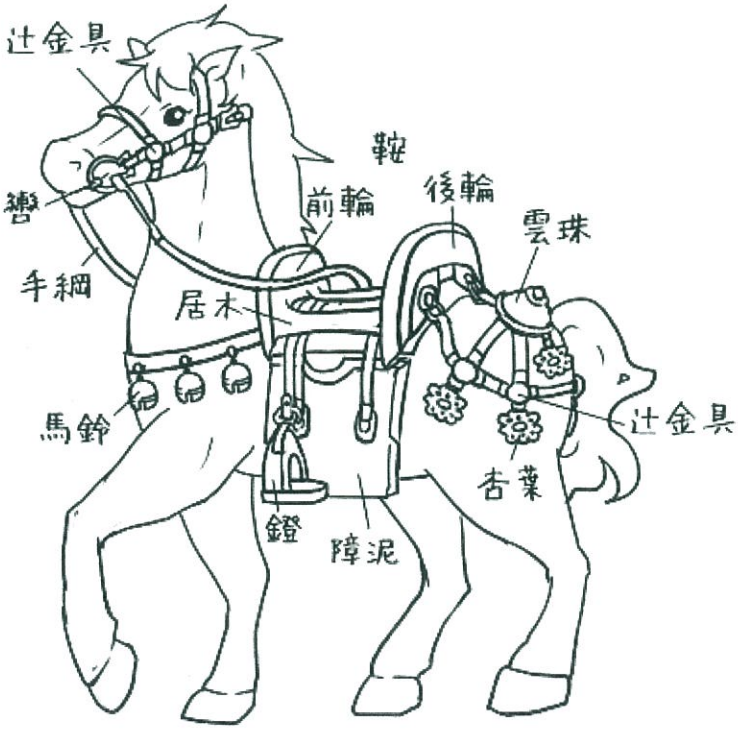
○ 古墳の形態・・・ほとんどの古墳が横穴式石室を持つ円墳です。墳丘の直径は、平均10m程度ですが、中には、Ｂ1号墳（ぢいが塚）のようには、直径36mを測る大きな古墳もあります。また先に記したとおり、これら古墳は家族墓です。
※家族墓とは、現代の私たちのお墓、　所謂「先祖代々の墓」と同じように一つのお墓に家族が埋葬される形態を言います。

○ 副葬品・・・市内のほとんどの古墳が、明治・大正頃までに盗掘を受けているため、副葬品の詳細な様相を窺い知ることはできません。しかし、市内の神社や宮内庁、博物館等に奉納・寄贈された副葬品を見てみると、全国的な後期古墳の副葬品と同じように、直刀・鉄鏃等の武具、馬具、玉類・耳飾り等の装飾品、須恵器・土師器等の焼き物などが出土しています。

○ 古墳時代のムラと暮らし・・・安曇野に古墳が築かれ始める時期と同じくして、それまで点在していた家々が集落としてまとまり始めます。現在わかっている古墳時代のムラは、烏川扇状地扇端の段丘上、穂高の矢原、白金、等々力地区で発見されています。彼らは、烏川から導水する高い治水工事の技術を有し、徐々に耕作地を増やしていったと考えられています。今後、油川や天満沢の流域でもこのようなムラが発見されるかもしれません。

Ｂ５グリッド馬具出土状況

Ｂ３グリッド赤色顔料・ガラス小玉出土状況



馬具模式図

2015年度穂高古墳群Ｆ９号墳の発掘調査

國學院大學考古学研究室

調査の目的

安曇野市穂高地区には、80基以上にのぼる古墳群が広がっており、「穂高古墳群」と総称されています。これまでの研究によって、これらは古墳時代後期に築造され、奈良時代初頭まで利用されていた可能性が指摘されてきましたが、詳細が明らかな古墳は少ない状況でした。そこで、國學院大學考古学研究室では、2009年度よりF9号墳を対象として、考古学実習による学術発掘調査を進めています。

これまでの調査の成果

【墳丘】

・円墳。直径約17.0m・高1.32m。ただし、地形改変により現在の規模は、築造当時と異なる可能性がある。

・古墳築造以前の自然堆積層、墳丘盛土と推測される土層を検出。

【石室】

・後世に破壊されて天井石は失われており、近代に土砂で埋め立てられていた。

・無袖式の横穴式石室。長軸の残存長約7m、幅1.3m～1.8mの持ち送り構造。

・上段は小口積み、下段は平積み。石室入り口である閉塞石が確認された。

・奥壁で石積みの土台となる腰石を確認。

【遺物】

・土師器（杯）、須恵器(蓋杯、高杯、甕、長頸瓶、子持壷など)、馬具（飾金具）、鉄鏃、刀子、勾玉（瑪瑙製）、管玉（碧玉製）、切子玉（水晶製）、ウマの下顎と歯、中世の銭貨、近代の硬貨。

・閉塞石付近内側で長頸瓶、蓋杯、甕、刀子、鉄鏃が集中的に出土(土器集中区)（2013年度報告）。

・土器集中区の須恵器は主に８世紀代、在地産(蓋杯など)と搬入品（美濃須衛窯産）（長頸瓶・甕・椀など）大きく二者が存在する。

２０１５年度調査の成果と課題

【墳丘】

・墳丘の構築方法と、墳端・周溝の確認を目的として、墳丘北側のⅣトレンチを拡張。

・墳丘構築時の墳丘の基盤となる層を確認。

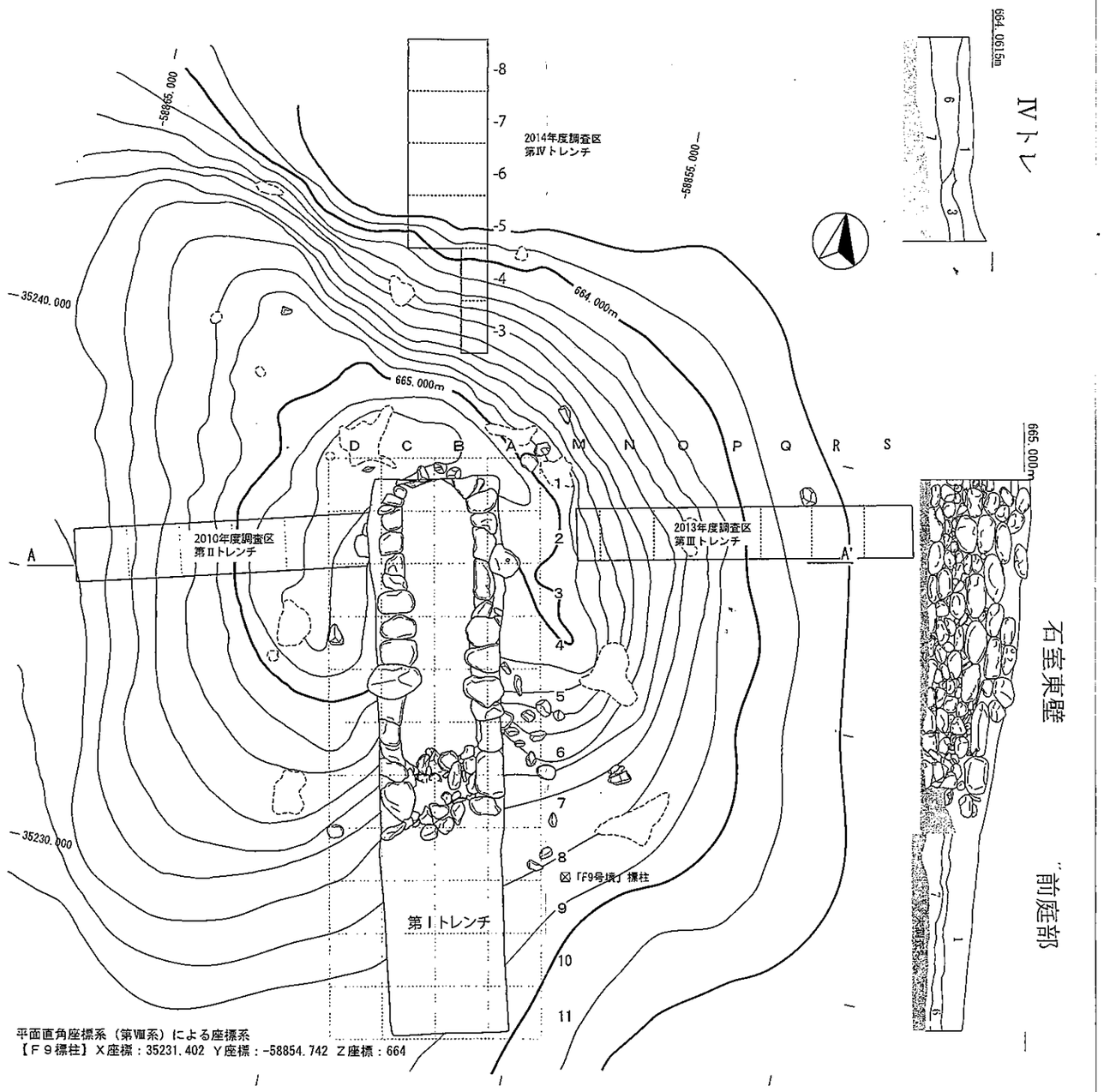
【石室】

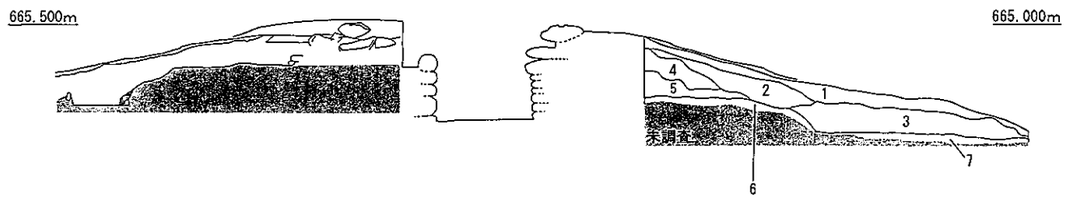
・初葬時の石室床面かと思われる礫床と、その直下の自然堆積層を確認。

・Ｉトレンチ B3・B4グリッドからガラス小玉、B4グリッドより鉄鏃、須恵器（子持壷）、切子玉、B5グリッドより馬具（轡など）が出土した。

・石室の完掘、最下段の石積み方法、石室掘方の確認が課題。

(2015.9.2)





穂高F9号墳墳丘平面図・側面図　0 (S=1/100) 4m